

口腔内常在菌。④ 病原菌—好気性 5 種, 嫌気性 7 種。
方法: 検体 0.1 cc とイソジン希釈液 0.3 cc を 15 秒, 30 秒, 1 分, 2 分, 5 分間混合し, すばやく滅菌蒸留水を加え遠心, 洗滌し沈澱物を 1 滴 GAM ブイオン培地に培養し (37°C, 24 h~48 h) 混濁の有無を測定した。また, 有機物混入による効力の低下を調べるためイソジン液を GAM ブイオン培地で希釈したものに唾液を 1 滴加え培養した (37°C 24 h)。

結果。① 唾液に対しては 5 倍希釈まで有効であった。② 唾液遠心後の沈澱物に対しては 30 倍希釈まで有効であった。③ 口腔内常在菌に対しては 50 倍希釈まで有効であった。④ 病原菌, 好気性菌, 嫌気性菌に対しては 100 倍希釈まで有効であった。⑤ 有機物が混入するとイソジンの効果は著しく低下した。

以上, 結果をみると唾液を直接検体としたものは 5 倍希釈まで有効であったが, 5 倍希釈では殺菌時間にはばらつき (15 sec~5 min) が生じ始めたことにより, イソジン液を口腔内消毒薬として使用する場合, 3 倍希釈程度のものが最も有効と考えられた。

6. 顎顔面頭蓋の骨格構成と副鼻腔との関連に関する研究

栗田定明, 深沢裕文, 斎藤 正, 遠藤教昭, 三谷英夫 (歯科矯正)

顎顔面部には, 上顎骨が関与する機能空間域として鼻腔, 咽頭気道, 口腔等が存在するが, Moss はこれらの空間域が matrix となって, 鼻上顎複合体の成長発育や解剖学的構成に重要な役割を果たすと理論づけている。しかし, 一般的にこれらの空間域の機能的役割を区分して, それらが顎顔面部の骨格構成にどのように影響するかを把握することは困難である。そこで本研究では副鼻腔, 特に上顎洞に注目し, それが上顎骨のなかでどのような位置関係を示すかについて検討し, 種々の機能に関与する上顎骨の形態構成のメカニズムを知る糸口とした。

研究資料として, 18 歳以上の日本人女子 300 名の側方頭部 X 線規格写真 (セファロ) を用いた。上顔面頭蓋部の骨格型の評価を行うため, facial diagram による図形分析法を基に, 上顎骨前方部の前後の距離と垂直的距離とによって標準位群 (34 名), 後方位群 (32 名), 前方位群 (17 名), 上方位群 (21 名), 下方位群 (17 名) に分類した。セファロ透写図上に計測点, 計測項目を設定し, 各群間で, 上顎洞の形態にどのような差があるか検討を加えた。

その結果, 以下の所見を得た。

1. 上顎洞の形態とその前方部の位置は, 上顎骨前方部の前後的位置には関係しなかった。

2. 上顎骨が下方位をとるほど, 上顎洞の上下径ならびに全体の面積は大きくなる傾向を示したが, それは主にフランクフルト平面より下方での増大のためであった。

3. 上顎洞は上顎骨が関与する種々の機能のなかで, 構造的に複雑な役割を果たしているのではないかと推察出来た。

7. 顔面非対称の骨切り術

高橋善男, 前川理人, 長坂 浩, 川村 仁

(口腔外科 1)

顔面非対称は種々の原因で生ずるが, 重大な基礎疾患もなく進行性でもない場合は, 顎矯正外科を適用することで良好な結果を得ることができる。しかし, その治療対象部位はさまざまな様相を呈していることから, それを治療するための骨切り術や骨片の移動は複雑となる場合が多い。今回, 顔面非対称の顎矯正外科治療例のなかから, それぞれ異った骨切り術を適用した 4 症例を報告した。

症例 1: 21 歳女性。下顎正中線が 11.6 mm 右方偏位を示す顔面非対称。両側下顎枝に矢状分割術を行い, 下顎歯列弓を左方に回転移動し, 咬合を改善した。症例 2: 20 歳女性。下顎正中線が 3 mm 右方偏位を示す顔面非対称。頤下縁の右後方位を認めた。右側下顎枝に垂直骨切り術, 左側下顎枝に矢状分割術を行い下顎歯列を左方に回転移動し, 咬合を改善した。また, 頤下縁に水平骨切り術を行い, 左前方に移動した。症例 3: 22 歳女性。上顎正中線が 1 mm, 下顎正中線が 2 mm 右方偏位を示す顔面非対称。上顎の後方位, 上顎臼歯部での縦方向の過成長及び幅径の狭小と前歯部開咬を示した。上顎に Le Fort I 型骨切り術を行い, 前歯部群と左右臼歯部群に 3 分割し, 上顎歯列弓の拡大と位置の正常化を図った。また, 両側下顎枝に矢状分割術を行い, 下顎の左方への回転移動を行った。症例 4: 21 歳女性。上顎正中線が 1.5 mm 右偏, 下顎正中線が 7 mm 左偏した顔面非対称。上顎劣成長, 上顎咬合平面の左上りの傾斜, 上顎臼歯部幅径の狭小を示した。上顎に Le Fort I 型骨切り術を行い, 左側上顎犬歯と小白歯の間で 2 分割し歯列弓を拡大し, 上顎を前方移動し, 咬合平面の傾斜も改善した。右側下顎枝に矢状分割術, 左側下顎枝に垂直骨切り術を行い, 下顎を右方